

個性とエコを繋ぐ！古着と生きる「私のサステナブルファッション」

ショッピングの新常識とも言える「スリフティング」の魅力やコツとは…？



By YUUMI IKEUCHI  2022/03/04



若者たちの間で注目を集めている「古着」。ブーム到来の背景には、高まる環境意識をはじめ、ブランドストーリーや歴史、個性を重視する“コンシャス”な消費などが関係しているのかもしれない。

そこで今回は、独自の感性でオシャレを楽しむミレニアル世代のオピニオンリーダー、前田エマさんと Michelle さんにインタビュー！

ショッピングの新常識とも言える「スリフティング（古着を買うこと）」の魅力やコツ、服を買うときに重視しているポイントや、手放すときの工夫、自分らしくサステナブルなファッションを楽しむ方法について聞きました。



■前田エマ

モデル、エッセイの執筆、写真、ペインティング、ラジオパーソナリティ、キュレーション、本・映画・音楽から世界を学ぶ勉強会を主催するなど、分野にとらわれない活動が注目を集める。

CEDRIC DIRADOURIAN



■Michelle

古着に新しい価値を見出すヴィンテージバイヤーとして、ヴィンテージやリメイクのオンラインファッションショップ「BÉBÉ」を運営。その傍ら、モデルやディレクターとして企業とのコラボレーション活動を行う。

CEDRIC DIRADOURIAN

「サステナブルファッション」の印象

Michelle 「最近、サステナブルやエシカルという言葉が独り歩きしているように感じる事があって。個人的には、今あるモノを長く使うことがサステナビリティに繋がるのかなと思うけど、どう思いますか？」

前田エマ 「私も、祖母や母からお下がりをもって着たり、今ある服に物語を加えたりすることの方が好きで、そういった価値観に共感できるブランドや古着を購入することが多いです。

なので、純粹に『好き』という気持ちが先にあって、結果的にサステナブルファッションに繋がっているのかなと。
Michelle ちゃんがヴィンテージショップの運営を始めた理由も知りたいです！」

Michelle 「実は『BÉBÉ』の運営を始める前から、友人と一緒に古着を買い付けて、オンラインショップで発売していたんです。でも、ちょうど開始から4年目という節目に、お互い独立することになって。

私はやっぱり、大好きなファッションと関わっていたかったし、地球に優しいことがしたいという想いが強くて、自分のヴィンテージショップ『BÉBÉ』を立ち上げました。

『BÉBÉ』は古着の販売だけでなく、リメイクも行っていて、これがまたワクワクするんですよ。たとえば、数時間前まではシャツだったものが、少しの工夫でスカートに変身して、まるで全く別の服を着ているかのような新鮮な気持ちになるんです。リメイクをすることで、『この服をもう一度着てみたい』と思ってもらえたら嬉しいです」



服を買うときに重視すること

Michelle 「私が服を買うときは、ブランドの背景にあるストーリーを重視しています。『BÉBÉ』のお客様の多くも、私たちのストーリーに共感して下さっているんじゃないかな。

最近では大型の古着屋さんなどで売れ残ってしまったスウェットを購入して、袖などのパーツを別の生地に変えてリメイクしているのですが、そのプロセスを共有すると、少し汚れがあったり、毛羽立っていたりしても、お客様は『逆に味がある』と喜んでくれるんです！」

前田エマ 「廃れそうなものや本来なら無くなってしまうものに、命を吹き込んであげているんですね…素敵！

私もブランドストーリーに魅力を感じるタイプだから、『ブランドのバッグが欲しい』というよりは、『〇〇さんが作っているから欲しい』など、商品が生まれた背景に関心を持つことが多いです。

私、ファストファッションと呼ばれるようなブランドで服を買うこともあります。労働問題などが問題になっていることも知っていますが、私一人がその商品を買わないことで、その人たちを救うことになるとは正直思えません。

私の選択がSDGsの実現に繋がっているかどうかは、見極めるのが難しくて。いつか、罪悪感なく購入できる世界になって欲しいし、どうしたらそんな世界がくるのか考えることも必要だと思っています。言っていることと矛盾した買い物かも知れませんが…」

ストーリーに共感したブランド



CEDRIC DIRADOURIAN

前田エマ「今日着ているのは『teasi』というブランド。実はこれ、リサイクルショップで売られている服を繋ぎ合わせてできたワンピースで…！」

タケナカタケヒロさんという男性が一人で毎日作っていて、その日の彼の気分や見た風景によって服の表情がコロコロ変わるのが魅力的。彼にとっては、日記のような服なんです。

あとは、今日持ってきた『YUKI FUJISAWA』も、古着に箔と染めを施すことで新しい命を吹き込んでいるブランドで、そんなコンセプトに共感しています」

Michelle「どちらもすごく素敵！『YUKI FUJISAWA』もそうだけど、ストーリーが魅力的な国内ブランドって実はたくさんあって、私もよく展示会に行ったりしてます。

でも、素敵だなと共感する服が、必ずしも自分に似合うとは限らないじゃないですか。なので、私は観賞用として楽しむものと、実際に着るものを分けてます。

私服は海外ブランドを買うことが多くて、お店にもよりますが、商品素材から梱包スタイルまで、比較的サステナビリティを意識している印象を受けますね。でもやっぱり、手前味噌ですが『BÉBÉ』をオススメしたい！（笑）」

スリフティングのコツ

前田エマ「今でこそ古着を買うことは服を買うときの選択肢として当たり前ものだけれど、一番最初に古着を買ったのは中学生の頃でした。お金はないけど、みんなとちょっと違うオシャレがしたくて、（笑）。

古着って唯一無二だし、パンチが効いているものが多いので、私は**コーデのアクセント**として取り入れられるものが好きです。インナーとして覗かせたり、柄物だったらポイントとして使ったりしています」

Michelle「私も最初は全く同じ理由です！ 当時は『Flamingo』や『KINJI』などの有名な古着屋さんによく行ってました。

大量の古着の中からビビッと来たものを見つけ出して、安く手に入れる満足感と高揚感がクセになりますよね。古着のおかげで、周りとは被らないオシャレの魅力にも気づきました」

前田エマ「海外旅行では旅先の古着屋さんをチェックします。服を見ると、その旅のことを思い出して、**自分の物語と一緒につむいでいける**気がして嬉しいです。

でも私と Michelle ちゃんは、通ってる古着屋さんも選ぶ服も、きっと全然違いますよね。私の場合、きっと昔はパーティなどで使われていたであろうふりふりとした服や、メルヘンな服が好き。下北沢にある『Mél』という古着屋さんの Instagram はよくチェックしていて、お店も素敵です。

Michelle ちゃんは恐らく、ヴィンテージの歴史や知識をもって服選びをしていますよね。私はそこまでではないので、コレクター的な楽しみ方をしている人には憧れます！ スリフティングのコツとかがありますか？」

Michelle「そんな風に言ってもらえて嬉しいです…！」

買い付けのときも、私服を選ぶときもそうなのですが、古着は量が多いので、初めから一つひとつをじっくり見るより、**まずは視野を広げて、自分の好きなカラーや目が奪われるセクションを先に行く**ようにしています。

私は派手なアイテムが好きなので、カラフルなコーナーには特に目が行きますね。その後に、サイズなどの細かいチェックを始めます。古ければ良いというわけでもないのですが、最終的には今のトレンドにもマッチしていて、自分に合うものを基準にしています。

あとは、店員さんの雰囲気や熱量も大事にしています。特に、一緒に服を選んでもらったりすると、特別な思い出として残ります」

前田エマ「たしかに、**店員さんの人柄や個性が表れる**のも、古着屋さんならではの魅力ですよ～！」



CEDRIC DIRADOURIAN

服を手放すときの工夫

Michelle 「基本的にはフリマか、『古着 de ワクチン』という回収サービスを使って、不要になった衣類を手放しています。『古着 de ワクチン』では、専用の回収キットを購入して、そこに自分が使わなくなった服を詰めて着払いで送れば、服を再利用してもらえると同時に、世界の子どもたちにワクチンが寄付される仕組みになっているんですよ」

前田エマ 「そんなサービスがあるんですね！」

Michelle 「申し込みから集荷まで、家にいながらできるので、気軽に寄付できるという点ではオススメです」

前田エマ 「どんなに一生懸命に選んで買っても、どうしても着なくなってしまう服は出てきますよね。私はフリマアプリを使ったり、実際にフリマに出したりして、なるべくクローゼットの中はすっきりさせています。服を全て把握したいので、持っている服の量はなるべく少なくしたいんです」

自分らしくサステナブルなファッションを楽しむコツ



CEDRIC DIRADOURIAN

Michelle 「新品を買うこと自体は決して悪いことではないのですが、買った物に対して、もっと愛情を込めて向き合うことが大切だと思います。一度きりではなく、今後長く愛用できるように、まずは**何のためにお金を払っているのか**、立ち返ることが必要ですよ」

前田エマ 「私はいつか子どもが持てる人生を歩めたらいいなと思っています。そのとき、今私たちが昔の古着に対して憧れを抱くように、いつか自分の子どもが、私たちの世代の服に興味を持つかもしれないですよ」

だから、たとえ自分が着なくなったとしても、後の世代に残していきたいと思えるような服は残しています。服と出会う喜びを、世代を超えて積み重ねていくことができれば、とても幸せです」